

## 在原朝臣業平の実伝を探る

四天王寺大学・帝塚山大学非常勤講師

内田美由紀

はじめに

- ・「月刊大和路ならら」2025年9月号 「業平の実伝」
- ・『伊勢物語考—成立と歴史的背景』(2014) 『伊勢物語考Ⅱ—東国と歴史的背景』(2021)
- ・『伊勢物語』の成立と史実 昭和時代から上野理氏・阿部俊子氏・片桐洋一先生ら
- ・『伊勢物語』第6段「芥川」後人注 「太郎国経の大納言」延喜二年(902)以後の呼称
- ・『伊勢物語』第39段(崇子内親王の葬儀)後人注 源の至は、源の順(後撰集撰者)の祖父

業平の実伝

### 一、業平誕生

- 1) 業平の生まれ(叔母・甥結婚) 淳和朝 天長二年(825)生まれ
- 2) 淳和天皇の『令義解』=大宝令・養老令の官撰注釈書 「妃二員 右四品以上」(皇族、内親王)
- 3) 「業」平と嵯峨天皇の「業良親王」……因「業」・「業」苦、なりわい・しごと・職務  
嵯峨(神野親王)と異母妹高津内親王との皇子「業良親王」/親王・内親王の結婚=「業」  
業良親王、清狂不慧→皇太子にできない→高津内親王を廃后。
- 4) 阿保親王の流罪～入京(810～824) 『続日本後紀』  
阿保親王は薬子の変で連座し流罪(大宰員外帥)。平城薨去の恩赦で帰京。翌年、業平誕生。
- 5) 兄・行平  
行平は弘仁九年(818)生(『公卿補任』)。業平の異母兄(内親王は畿内から出られない)。

### 二、業平の若い時代 業平 2～24 歳

- 1) 業平 賜姓(天長三年 2歳)  
阿保親王の上表で高岳親王の子女と同じ「在原朝臣」姓に。仲平は次男につける名前、阿保親王の長男はこの時点でいない。業平は阿保親王の五男。
- 2) 在原氏の一族(父方)  
阿保親王が平城第一皇子。第三皇子・高岳親王(真如)は嵯峨朝の皇太子、薬子の変で廃太子となった。この時代は長子相続ではなく、母方の力関係で皇太子が決定した。
- 3) 百済王の一族(母方) 百済王; くだらのこにきし  
伊都内親王は桓武天皇(737～806)の晩年の皇女。伊都内親王の祖父・藤原乙叡(タカトシ; 761～808)が平城の不興を買い、親世代の桓武と娘を結婚させた。乙叡父・藤原継縄は桓武朝の右大臣、乙叡母・百済王明信は桓武朝の尚侍で嵯峨の元服時に正三位。百済王明信の姪の貴命は嵯峨女御、さらに貴命の姪の慶命は仁明朝の尚侍で、嵯峨の妻だった。恩赦で帰京させた阿保親王を、伊都内親王と結婚させたのは、嵯峨の指示か。
- 4) 承和の変(承和九年; 業平 18歳) ※高子(二条后)は承和九年生まれ  
嵯峨、承和九年七月薨去。阿保親王が「橘逸勢が皇太子恒貞(父・淳和、母・嵯峨皇女正子内親王)を東国で擁立の疑い」という書入手し、嵯峨后・橘嘉智子に渡し、橘嘉智子はそれを藤原良房に渡してしまう。仁明は良房と組んで、恒貞親王を廃し、自分の子の道康親王(=文徳; 母・藤原順子)を皇太子に据えた。阿保親王は十月に亡くなった(『続日本後紀』)。
- 5) 崇子内親王の葬儀(業平 24歳)  
『伊勢物語』第39段、淳和皇女崇子内親王の葬儀にきた男(業平)は女と乗る車に、源の至に咄を入れられた。至は不遜な態度。至の父が淳和の猶子で、崇子内親王は至の義理の叔母。

『続日本後紀』では、良貞親王・崇子内親王が相次ぎ急死。良房が「臣、深謀遠慮なしと雖も」と言いつつ食封を減らすように請うが、白亀の献上で嘉祥に改元してうやむやに。翌年正月、仁明天皇は、承和の変の廢太子・恒貞親王に三品、阿保親王の遺児・在原業平に従五位下を与え、さらに十月、承和の変の主犯とされた橘逸勢の遺児に入京許可を与えた。

### 三、謎の十二年 業平 25～37 歳 (嘉祥二年正月以降、業平は名前が出なくなる)

#### 1) 仁明の晏駕 (深草と鶉) 晏駕=薨去

『伊勢物語』第 123 段 (深草の鶉) (伏見稻荷大社の雑誌『朱』第六十号「鶉となりて」)

仁明に毒殺説あり。薨去翌月「山野之禁」(狩猟は軍事に転用可能)。四十九日に清涼殿に仏像と經典を置き莊嚴して御齋会。翌年「今上(文徳)不忍御之」と清涼殿を深草に移築し嘉祥寺に。

#### 2) 文徳と業平

業平は親王と内親王の子、文徳は母が藤原順子。桓武は母が渡来系の高野新笠であったため、聖武皇女を母に持つ氷上川継を「氷上川継の変」で排斥したと言われている。

#### 3) 須磨と布引の滝 (行平・業平の蟄居; 古今集・『伊勢物語』)

“在原業平の変”は記録にないが、行平は「田村の御時(文徳朝)事にあたりて」須磨に蟄居している(古今集 962)。業平も布引の滝で共に歌を詠んだ(古今集 922・923)。

#### 4) 国家鎮護の東大寺大仏の頭落つ

斉衡元年、文徳は母の藤原順子を皇太后とした。翌年須磨から帰京した行平を因幡守に任命。地震が続く、五月、東大寺大仏の仏頭が落下(『平家物語』にも言及あり)。葉子の變の廢太子・真如を大仏修理檢校に据えたが、地震が止まず、良房妻・源潔姫や良房の兄・長良も亡くなって、平城の孫の在原氏らの位と官職を上げていった。桓武にならって南郊の祭祀(天帝が皇帝信任を示すというパフォーマンス)も行うが、文徳は急に病に倒れ、崩御。(『日本文徳天皇実録』)

#### 5) 文徳女御多賀幾子の七七(天安三年正月、業平「謎の十二年」中; 天安三年四月貞観に改元)

『日本三代実録』天安二年十一月十四日、藤原多賀幾子卒。右大臣良相第一女。

『伊勢物語』第 77 段 田村の帝(文徳)女御たかきこの安祥寺での法事。歌に「春の別れ」とあり、四十九日の法事。右大将・藤原常行が、歌詠みとして右馬頭(業平)に歌を詠ませる。

### 四、復権 業平 38～42 歳

#### 1) 母・伊都内親王の死(『伊勢物語』第 84 段; 業平「謎の十二年」中)

『日本三代実録』貞観三年九月十九日無品伊登内親王薨。『伊勢物語』第 84 段「身は卑しながら母なむ宮なりける」「子は京に宮仕へしければ」「一つ子にさへありければ」「老いぬればさらぬ別れのありといへばいよいよみまほしき君かな」(古今集 900)「世の中にさらぬ別れのなくもがな千代もと祈る人の子のため」(古今集 901 業平朝臣)

#### 2) 叙位(38 歳)と任官(39～41 歳)『日本三代実録』

貞観四年三月七日授正六位上在原朝臣業平従五位上。(伊都内親王の死去から約半年後)

貞観五年二月十日散位従五位上在原朝臣業平為左兵権佐。同年三月廿八日次侍従。

貞観六年三月八日…左近衛権少将。

貞観七年三月九日…右馬頭。

#### 3) 清和元服(貞観六年正月; 業平 40 歳)

同廿七日藤原朝臣多美子為女御。(天皇加元服。此夕選入後宮。有専房之寵。少頃為女御。)

#### 4) 三条の不行幸(貞観八年三月廿三日; 業平 42 歳)

女御・多美子の実家で花の宴。「百花亭詩」を文人 40 人に作らせる。夜には女樂。

#### 5) 染殿行幸(貞観八年閏三月)

清和の生家。外祖父・良房の染殿第で花見。この年、文人数人に「落花無数雪詩」。

### 五、三条右大臣失脚 業平 42~43 歳

- 1) 常行と多美子 基経・高子 (父・長良、後に良房の猶子) とイトコ同士  
(常行の読み; 『伊勢物語』では「つねゆき」、『尊卑分脈』で「トキツラ」)
- 2) 応天門の変 (貞観八年閏三月十日; 業平 42 歳) 「伴大納言絵巻」
- 3) 応天門の変の処理 (貞観八年; 業平 42 歳)  
大納言伴善男が左大臣源の信 (まこと) を告発、右大臣良相と共に包囲。清和は外祖父・良房に解決依頼、「勅太政大臣撰行天下之政」源の信は無罪、伴善男に嫌疑。伴善男遠流。良房の猶子・基経が従三位中納言に。良相は蟄居、良相長男・常行は正四位下右近衛大将。
- 4) 藤原高子女御、陽成誕生・立太子  
貞観八年十二月廿七日基経同腹の妹・高子 (25 歳) を入内させ女御に。貞観十年十二月には皇子 (のちの陽成) 誕生。貞観十一年二月、生後三ヶ月で立太子。
- 5) 三条右大臣良相の失脚と入間の郡 (業平 43 歳)  
『日本三代実録』三条右大臣・藤原良相は貞観九年十月に亡くなる。  
『貞観寺田地目録』貞観九年二月、良相の荘園が、清和の護持僧・真雅 (空海の弟) と良房とが作った貞観寺 (良房の私寺) に施入された。『伊勢物語』第 10 段「母なむ藤原なりける。住む所なむ入間の郡みよしのの里」は、入間郡広瀬の近く。

### 六、源融との関わり 業平 40~48? 歳 『日本三代実録』

- 1) 融、陸奥出羽按察使 (貞観六年三月) 陸奥国と出羽国の監察官。すぐには出発しない
- 2) 富士山貞観噴火 (貞観六年五月) 大噴火。青木ヶ原樹海ができた。富士川上流にも火砕流。
- 3) 応天門の変と源氏 (貞観八年閏三月~) 融は翌年まで関知していない。
- 4) 貞観地震・津波 (貞観十一年五月) 按察使は基経だったが、多賀城下には融が祀られている。
- 5) 河原の院と塩釜 (貞観十七年以降の呼称) 『伊勢物語』第 81 段。塩釜を模した河原院。

### 七、常行の死 業平 49~52? 歳

- 1) 常行、陸奥出羽按察使 (貞観十五年) 通例、大納言か中納言を複数にして一人を按察使に。
- 2) 常行の薨去と基経の四十賀 (業平 51) 常行薨去と基経の四十賀が同じ年。  
桜花散り交い曇れ老いらくの来むといふなる道まがふがに (『伊勢物語』第 97 段)
- 3) 業平、常行への贈従二位の使者 (『日本紀略』)  
貞観十七年二月十七日贈従二位使~貞観十八年十二月廿九日山陵使の間、業平、史書に見えず。
- 4) 東下り『伊勢物語』歌から推測  
伊勢尾張→三河国八つ橋→宇津山→富士山→武蔵国入間郡みよしの→浅間の煙→信夫山→興の井 (末の松山・多賀城) →塩釜 (多賀城の外港) →栗原の姉齒 (対・伊治城)
- 5) 栗原の姉齒 姉齒から蝦夷の刀の出土あり。迫川を隔てて朝廷の拠点・伊治城と向かい合う。

### 八、基経と高子・陽成 業平 52~56 歳 『日本三代実録』

- 1) 清和退位と源融の蟄居 (業平 52 歳)  
貞観十八年四月、大極殿火事。同十一月廿九日、清和、譲位。左大臣源融も蟄居させる。
- 2) 業平、融への中使に立つ (業平 54 歳)  
元慶二年、融の上表に業平が中使 (天皇の使者) として綸旨を伝えたとある (陽成十歳。高子か)。同年、元慶の乱で秋田城が蝦夷に占拠・放火されたが、藤原保則が反乱を収めた。三月、淳和太皇太后崩御。清和院齋講米 150 斛 (こく) 穀千斛賑給。清和、仏事に大盤振舞。
- 3) 清和の仏道修行 (業平 55 歳)

元慶三年、清和落飾入道。十月大和国巡礼。(陽成・高子の) 勅で米百斛を費用として支出。勅で付き添いの武官も出すが、清和が断り、付き添いは在原行平と藤原山蔭。

4) 業平卒 (56 歳)

元慶四年五月廿八日。卒時年五十六。

『伊勢物語』第 125 段 つゐにゆく道とはかねて聞きしかど昨日今日とは思はざりしを

5) 基経、太政大臣に、清和崩御 (業平死後)

元慶四年八月廿三日 水尾山寺普請のため、水尾山から嵯峨棲霞観 (融の山荘) にうつる。

同十一月廿五日 体調が悪くなり、円覚寺 (基経の粟田山荘) に移送される。

同十二月四日 基経が太政大臣に。申刻に円覚寺で清和崩御。三十一歳。断食？

※この後、陽成天皇・高子が、基経から離反。

まとめ 業平の一生

- 両親が親王・内親王。
- 同年代 (二歳下) の文徳天皇の即位時、行平とともに勘氣に触れ、須磨に蟄居。
- 文徳天皇の時代、地震や病気の流行、怪異などが続き、平城天皇の子孫の在原氏の従兄弟・兄弟の官職が上げられたが、業平は十二年の官位の空白ができた。
- 業平が散位正六位下の頃、右大臣藤原良相の長子・藤原常行に、歌人として仕えていたか。
- 業平の復権は、清和朝で伊都内親王薨去の喪明け以後。
- 清和元服、常行妹の多美子が女御となり、右馬頭・業平は歌人や物語作者として活躍した。
- 常行が陸奥出羽按察使の時に薨去。業平は贈従二位を伝える使者に。この際、東下りをしたか。
- 元慶二年、業平は、蟄居中の源融への (陽成天皇からの) 中使となった。
- 業平、元慶四年五月に卒。同年十二月に基経は太政大臣になり、同日、清和が薨じた。

